

The Journal of [機関誌 JAHMC (ジャーマック)]  
2017 May /vol.28 No.5

# JAHMC

Japan Association of Healthcare Management Consultants

2017  
5

INTERVIEW **東京一極集中が日本全体の活性化を牽引する**

市川 宏雄 氏

REPORT **医療法人が展開する「スマートウェルネス住宅」事業**

ルポ 1 社会医療法人栗山会(長野県)

ルポ 2 医療法人社団映寿会(石川県)

寄稿 **健康福祉のまちづくりと医業経営コンサルタントの役割**

美留町 利朗



公益社団法人

日本医業経営コンサルタント協会

Japan Association of Healthcare Management Consultants

## ルポ 1 社会医療法人栗山会（長野県飯田市）

# 「ウェルネスタウン丘の上」 医療・介護を街づくりの核として地域活性化に貢献

## 酒蔵跡地約 3700㎡に 複合施設を着工

社会医療法人栗山会（千葉恭理事長）が運営する飯田病院（452床；一般212床、精神240床）は1903（明治36）年の創設で、長野県内で現存する病院としては最古の歴史を持つ。二次救急指定病院であり、4病棟ある一般病棟はDPC導入3病棟（7対1）、地域包括ケア1病棟（13対1）から成る。一方で、精神科の標榜も1925（大正14）年からと古く、わが国の

精神科医療の“草分け”的存在であり、飯田市内では唯一の精神科入院機能を備えている。一般と精神の病床数がほぼ拮抗し、一般急性期と精神科を「二本の柱」にした日本では珍しいタイプの病院だ。こうした特性を生かし、早くから身体合併症患者への対応に尽力し、2016年診療報酬改定で再編された「精神科リエゾンチーム加算」や、新設の「認知症ケア加算1」などを、いち早く届けている。

栗山会は「2015（平成27）年度・スマートウェルネス住宅等



左から、富田勝彦総務副部長・「丘の上」開設準備室長、原重樹病院長、矢澤昭彦常務理事・事務局長

推進モデル事業」の選定を受け、橋北地区と呼ばれる飯田市仲ノ町にある、旧酒造跡地の約3,700㎡に地域包括ケア複合施設「ウェルネスタウン丘の上」（以下、丘の上）を着工。鉄骨造3階建て、建築面積1,131.60



「ウェルネスタウン丘の上」建物北側から望む完成イメージパース。地域の要請で旧酒蔵の建物を生かした



1903（明治36）年に創立された飯田病院。2009年、県から指定を受けて「認知症疾患医療センター」を設置。認知症の地域連携拠点として活動している

m<sup>2</sup>、延べ床面積 2,859.64m<sup>2</sup>の施設は今年6月末に竣工予定で、内装工事を経て7月末から入居可能となる。

「丘の上」は、1階部分に診療所・訪問看護・介護ステーション、通所リハ等の医療・介護機能に加えて、メディカル・フィットネス施設や地域住民の交流サロンを設ける。2・3階部分は、全36室のサービス付き高齢者住宅(サ高住)が入る。要するに、サ高住が地域包括ケアの「住まい」の機能を担うわけだ。また、敷地内にある旧酒蔵の1階部分をレストラン・カフェとして活用し、地元の民間事業者へ委託し、3食・おやつ等の配食サービスも提供する。「丘の上」の総事業費は約8億6,000万円で、整備費・設計費の一部に補助が下りる。

飯田病院院長の原重樹氏は次のように語る。「1階の診療所は地域の総合診療医としてドクターと看護師を配置し、“サ高住”入居者に対する診療や医学的管理に加えて、橋北地区で生活する人たちの在宅医療・在宅介護の拠点として機能する予定です。また、カフェ・レストランも365日体

制で地域に開放し、住民や旅行者なども一般のレストランと同様、自由に利用できます。近くに保育園・幼稚園もあり、交流スペースも設置しているので、これら施設は多世代交流が可能な“地域の広場”のような役割を目指します」。

### 歴史ある街の保存・再生とクロスオーバーする事業

国土交通省に当該事業を申請した背景には、急速なスピードで進む地域の高齢化・人口減少問題がある。2015年の飯田市の高齢化率は30.1%で人口は約10万1,000人だが、25年後の2040年には高齢化率が38.4%に達し、人口は8万人を割ると推計されている。

同市と14町村から成る長野県最南部の「飯伊二次医療圏」は、人口約16万2,000人をカバーしているが、「長野県地域医療構想」の同医療圏の病床推計では、「2015年度の許可病床総数は1,563床(稼働病床1,515床)、2025年に必要と推計される病床数は1,338床」としており、200床を超える入院医療ニーズの減少が見込まれている。

「特に橋北地区の高齢化率はすでに40%を超え、2005年から2016年までに人口は15.1%減少し、地域の空洞化が深刻化していました。小売店舗の廃業が相次ぎ商店街は衰退し、地区の商業機能が脆弱化したのです。この地区は飯田藩政時代には武家屋敷、馬場などがあつた

地区で、登録有形文化財の施設も点在し、地域住民から歴史ある街並みの保存・再生・活用が要望されていました」と語るのは、栗山会常務理事・事務局長の矢澤昭彦氏。加えて、福祉施設はJR飯田駅周辺に集中し、橋北地区周辺には1件のみ。退院後の患者の受け皿となる施設の絶対数が不足しており、「丘の上」のような“住まい”の機能を付加した医療・介護複合施設の需要が高いと想定された。

同会・総務副部長で「丘の上」開設準備室長の富田勝彦氏は、「市内に特養、特定施設等の介護施設はいくつか存在するのですが、高齢化の進展が速く、独居高齢者も増え、需要に供給が追いつかず、入所の待機期間が数年に及ぶ方も出てきました。サ高住のニーズがあることは、ある程度、把握していました」と話す。

矢澤氏と富田氏がキーパーソンとなり、建築士のアドバイスもあって2015年度の同モデル事業に栗山会も参戦することとなった。「歴史的な景観を残す地区で医療法人の事業と地域活性化をクロスオーバーする」という画期的なプロジェクトを計画し、東奔西走。矢澤氏らは橋北地区の自治会、街づくり委員会などと何度も事前協議を重ね、地域住民の意思を反映した上で、事業スキームを丁寧に作り上げていった。酒造メーカーから酒蔵の建物を買受けするのにも、それなりの費用負担が必



橋北地区・プランでは歴史ある街並みの保存・再生を目指した

要だったが、その建物を生かすのは「地域の要請」でもあった。「地域の景観に自然と調和する」複合施設を造りたいという同会の考え方に共鳴する住民が多数を占め、矢澤氏らは一定の手ごたえを感じていた。

「丘の上」の内外装材には、地元産材である根羽スギ、根羽ヒノキを使用し、地域林業の活力向上に寄与するとともに、屋根には太陽光発電パネルを設置し、その収益を地元の街づくりに還元するというプランは、「街づくりと地域の

活性化に貢献する」との考え方に基づく。

2015年度の同モデル事業の応募は全国から25件あり、採択されたのは全体で4件。医療法人による事業提案は4件あったが、選定されたのは「丘の上」プロジェクト1件のみだった。スキームの1つである「クラシカルな街並みや景観の保存・再生」が評価されたのは、まさに国土交通省独自の事業ならではといえる。

「国土交通省へは地域でどのような課題があり、そのための

解決方法、施設の全体像や期待される効果までを具体的な事業計画で示さなければなりません。結果として選定されることができましたが、審査のハードルは極めて高かったと思います」と矢澤氏は振り返る。

「文化的な香りのする街の景観を残すことに対して、飯田市も終始、協力的でした。医療・介護を街づくりの核として、地域の活性化や雇用創出にも貢献したい」と病院長の原氏は、今後の展開に期待を寄せる。